

公演名：ドビュッシー没後 100 年 ベヒシュタイン “響きの探求”

クロード・ドビュッシー / Français の本音～その魅力の真髓に迫る～

出演者：保屋野 美和(Pf)&ベンツェ・ボガーニ(Fg)

日時：2018 年 12 月 14 日(金)

会場：汐留ベヒシュタイン・サロン

ドビュッシーの没後 100 年を記念して、現在ベルリンを拠点に活躍されているピアニストの保屋野美和さんと、ハンガリー出身の世界的ファゴット奏者でミュンヘンフィルハーモニー交響楽団首席奏者のベンツェ・ボガーニさんをお迎えし、ドビュッシーとそれに関連した作品を集めたレクチャーコンサートを行っていただきました。(以下、演奏者自身によるレクチャーの内容は「 」にしています。)

プログラム前半は、保屋野さんのピアノソロのステージ。

始めにドビュッシーの代表曲、〈月の光〉を冒頭で演奏された後、保屋野さんはベヒシュタインについて、“柔和な響きのする楽器”であり、それがドビュッシーの世界観に合っていたのではないかと語られました。

次に、ドビュッシーとスクリャービンというほぼ同じ世代に活躍していた二人の作曲によるそれぞれの〈夢〉と〈マズルカ〉を続けて 4 曲演奏されました。

「スクリャービンは思い入れのある作曲家で、ずっと長く弾いています。二人の作曲家による同じタイトルの曲、聴き比べてみて下さい。ドビュッシーはアジアの音楽やロシア音楽など新しい物をたくさん取り入れつつ、自分の精神的な部分と共鳴する部分を追求した人。スクリャービンは、オカルト的で法悦的なところがあるが、新しい物を探しつつ、独自の神秘和音など、やはり自分のやりたいことを追求し後世に影響を残したという点でドビュッシーと共通しているなと思います。」(保屋野)

筆者はドビュッシー以外にも、スクリャービンはベヒシュタインと相性が良い、と聞いたことがありますが、保屋野さんの演奏を聞いて、なるほどと共感しました。スクリャービンは多声部が複雑に絡み合っており、ペダルや弾き方を工夫しないと響きが混濁してしまいがちですが、保屋野さんは一瞬一瞬の響きの変化を大切に、クリアな音色で即興的に表現されていました。また、ドビュッシーの初期の曲はあまり知られていない曲も多いけれど、今後積極的に取り組んでいきたいとのことでした。

その後は、一柳慧作曲の〈雲の表情〉第 1 番。

「(20 世紀の作曲家で)ドビュッシーに影響を受けていない人はおそらくいないでしょう。一柳氏は個人的にラヴェルの方が好きですが、ドビュッシーからも影響を受けているに違いないという部分があります。ドビュッシーは、格式ばった決まりごとをはずれた自由な律動(リズム)と色彩が重要であるという主張をした作曲家で、日本の音楽も似ているところがあります。小節線を感じないところや日本のわびさびに似たようなもの、自然の動きを音楽で表現しているところなど…。そういう点で、この一柳氏の曲はドビュッシーと通じる場所があります。」(保屋野)

説明の通り、調性や形式という枠をはずれた、自然に身をゆだねたような音楽で、刻々と変化する雲の表情を自由に描かれ、色彩豊かな演奏でした。

前半の最後は、ドビュッシーの《版画》。

「当時から印象派の作曲家と形容されたドビュッシー自身はそれに反論し、むしろ世紀末的な“象徴派”

といわれる芸術・文学（マラルメ、ボードレールなど）に興味があり、どちらかといえば自分は象徴派であると言っていたようです。決まった調性や決まった形式（ソナタ形式など）を設定せず、（作曲理論上は禁止されている）平行和音、連続五度の多用や自然への賛美など、彼が意図せずして印象派のように聞こえる側面も確かにあります。ただ、ペダリングの指示も細かく、音楽の輪郭もはっきりとしており、果たしてドビュッシーが印象派なのかどうかは永遠のテーマともいえます。」（保屋野）

《版画》は、ドビュッシーが二回のフランス万博で刺激を受けた異国趣味が色濃く反映されている作品ということで、どのようなところにそれが現れているのか具体的に解説して下しました。

「**第1曲**、〈パコダの塔〉は、ガムランの音楽、音階（**譜例1**）が使われています。他にも、ロシアの東方教会の旋法の音形も取り入れられており、オリエンタルな魅力があります。**第2曲**、〈グラナダの夕暮れ〉。グラナダはスペインのアンダルシア地方のこと。かつてはイスラムの統制下だった影響が残っており、アラビア音階が多用されています。面白いことに、2000年に発見されたドビュッシーの最後の作品〈燃える炭火に照らされたタベ〉に出てくるモチーフと全く同じ部分があります（**譜例2, 3**）。そして**第3曲**、〈雨の庭〉ではフランスの童謡を多用しています。（**譜例4, 5と譜例6, 7**）」（保屋野）

どの曲も色彩豊かで素晴らしかったのですが、特に一曲目のパコダの塔で、背景と前景が立体的に弾き分けられ、いくつもの声部がくっきりと浮かび上がってきた時に、ベヒシュタインならではの音域による音色の違いがよくわかり、感動しました。

譜例1. ドビュッシー:版画 I. 塔



譜例2. ドビュッシー:版画 II. グラナダの夕暮れ



譜例3. ドビュッシー:燃える炭火に照らされたタベ



譜例4. ドビュッシー:版画 III. 雨の庭(その1)



譜例5. フランスの童謡(その1)



譜例 6. ドビュッシー: 版画 III. 雨の庭 (その2, 3)

Tempo – en animant jusqu'à la fin

譜例 7. フランスの童謡 (その2)

[Nous n'irons plus au bois]  
 <もう森なんか行かない>

Anonyme

プログラム後半は、ファゴットのボガーニさんも登場し、ファゴットとピアノのデュオ。最初にドビュッシー《子供の領分》より〈ゴリウオーグのケーキウォーク〉。本来はピアノソロの曲ですが、ファゴットのおどけたような音色がぴったりでした。続いて《子供の領分》より〈象の子守歌〉。「この曲は音程も雰囲気もファゴットにとっても合っており、メロディーがファゴットのために書かれたかのような曲です。大きくて低くてゆったりとした楽器のファゴットで演奏するのにぴったりな曲なので、どうしてもやりたかった」(ボガーニ)ということでした。

その後、ドビュッシーに関連してデュティユーとブトリの作品が演奏され、最後は、ドビュッシーのチェロ・ソナタ。「ファゴットは、他の楽器の為のレパートリーであっても音域が合えばファゴットで演奏する、ということとはよくあります。ドビュッシーは、このチェロ・ソナタを作曲した時、この曲の雰囲気やテンションについては色々書いていますが、チェロのことやこの楽器で弾かれるべきだ、などとは一切書かれていません。」(ボガーニ)ということで、今回ファゴットとピアノの編成で演奏されました。二人の絶妙な息の合ったアンサンブルで、もともとチェロのために書かれた曲だということを忘れさせる素晴らしい演奏でした。素敵な時間をありがとうございました！

(文責：前田)